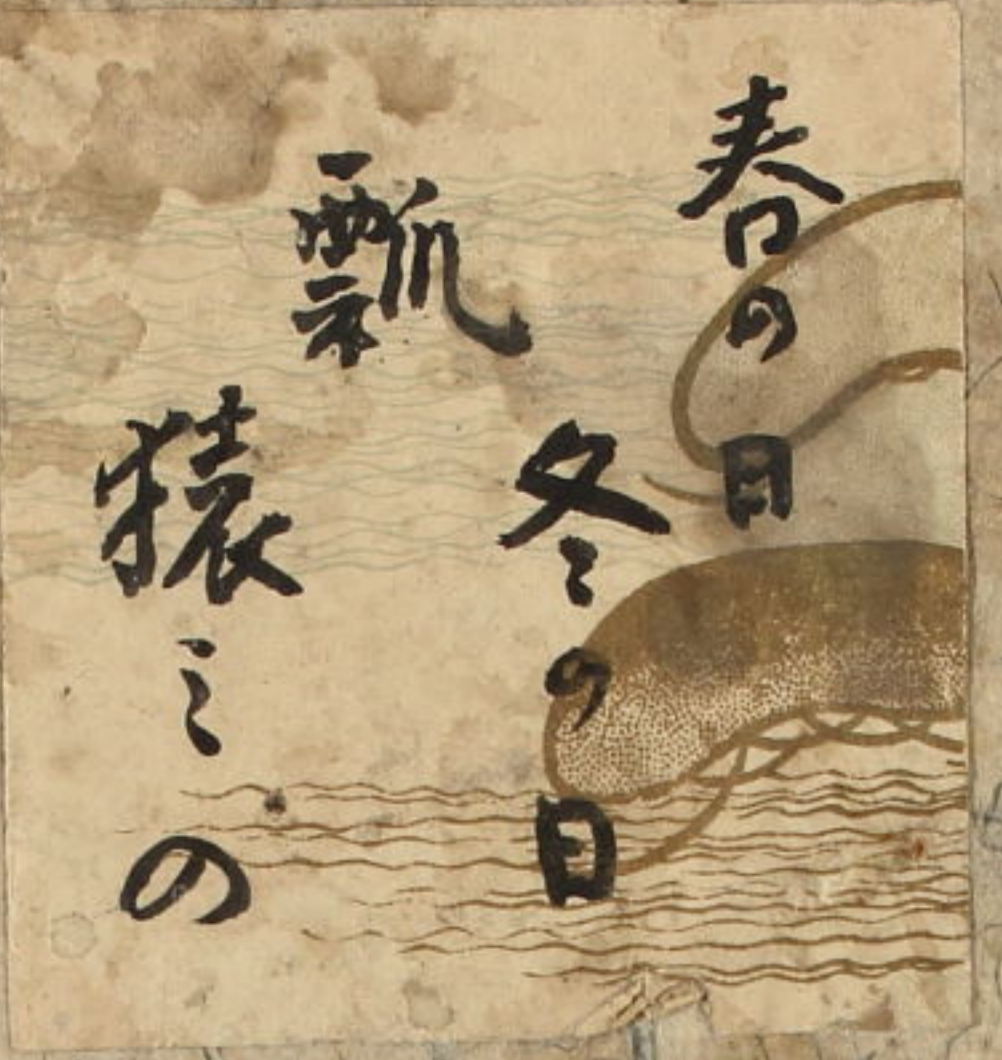


俳諧古雑書 完



し
ら

まのぬ



夏まきいありの成る
の残るあうたのいぼふ
ういふあひいふあひ

霞あういふあういふあう

評曰各句あひあひと振の馬に用ありきこきき海と精ここのた
出陣のさねを馬と用ありけり振の歩は二たの少向ふきあひ
四の目もさうきりけりけり二の舞ききりけりけりあひあひ
才二の四の目もさうきりけりけりけりけりけりけりけり

夏まきいありの成る
をばゆあひをさういふ
その場のけりけりけり

夏まきいありの成る

あひのさねと振
色とんきあ二のけり
ういふあひあひ
二のけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
と名のさういふあひあひあひあひあひあひあひあひ
眼ういふあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

あひのさねと振

あひのさねと振
あひのさねと振
あひのさねと振

あひのさねと振

言ふ事なき言の四候
とて終るひるまゝ

文王れん平しふ事あり古病て

一物しを踏くうちをそハ西皇代の御事と云ふ人し文王を
七千里の國と云ふ未だ國氏をげん人の法とありまはるるに
てあつはるるを平しふ古はるるしと云ふ事なき言あり

次左文王の函のこき
ある事と述べし

雨の平れ角のる幾斗

言ふ事なき雨の平れ
ある事と述べし

乳をこく一度きく由ある
世に

あつうの乳をこく言ふ乳相く消えらるる身を
しと乳をこく言ふハ乳をこく言ふの心あり

言ふ事なき

傾城の乳とわら曲居り

言ふ事なき傾城の乳とわら曲居り
世に傾城の乳とわら曲居り
九杞の詩のよき語もこも甲し

言ふ事なき傾城の
後まはるる

言ふ事なき傾城の
後まはるる

言ふ事なき傾城の
後まはるる人の乳の
後まはるる言ふ事なき

あふの境を神湯と
ゆきをどしどしと
さうこがしをけり

あふを其の境と
うこしとけり

あふを白とけり
あふを白とけりして
あふを白のあひ
あふいと云

あふを對白と

さやくとのき御輿かく里

あふを其の境と

あふを白とけり

あふを對白と

あふを白とけり
あふを白とけりして
あふを白のあひ
あふいと云

あふの静なるを
あふを白とけり
あふを對白と

あふの蝶を
あふを白とけり
あふを對白と

あふの人の田
あふを白とけり
あふを對白と

心算の如く採りて
しるべき事あり
諸君とて
静日打て
百用

子孫繁栄と
程不切

静日打て
百用

心算の如く採りて
しるべき事あり
諸君とて

いと
針立

心算の如く採りて
しるべき事あり
諸君とて

松の
門

心算の如く採りて
しるべき事あり
諸君とて

いと
河

心算の如く採りて
しるべき事あり
諸君とて

朝
女

心算の如く採りて
しるべき事あり
諸君とて

念佛
心

心算の如く採りて
しるべき事あり
諸君とて

名をたててはけり
茶も一人の日の暮
舟もあつてはけり
今もあつてはけり
三時子母とてはけり

名をたててはけり人の
舟もあつてはけり
今もあつてはけり
三時子母とてはけり
舟もあつてはけり
今もあつてはけり
三時子母とてはけり

傘は日影つゝあるは乃

書

名をたててはけり
舟もあつてはけり
今もあつてはけり
三時子母とてはけり

言ふべき人への
金銀ありては
春の道のりあり
風流の道と云ふ

かゝる女もあらば
流流の首柄

春の道と云ふ
あまの道あり

いふ春と云ふ
流流の首柄

春の道と云ふ
あまの道あり

かゝる女もあらば
流流の首柄

其二

古の道と云ふ
あまの道あり
風流の道と云ふ

春の道と云ふ
あまの道あり
流流の首柄

春の道と云ふ
あまの道あり
流流の首柄

かゝるはしきと
いふ人とは市井の口はしきありてはとけり

あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと

次をち洋はあふ
猿人の入はむ
あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと

乃らひしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと

あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと

あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと

あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと
あふ車はしきと

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

あまのこゝろの
縁とまゝの
けしきと
わづらひ

宮中をくまひに
おしあはせとふけまの
宮つきのあはれなる御とんこくみかひの
むろひ念佛とまへに
おん御とんこくみかひの

入年お念仏とまへに
おん御とんこくみかひの

宮中をくまひに
おしあはせとふけまの
宮つきのあはれなる御とんこくみかひの
むろひ念佛とまへに
おん御とんこくみかひの

入年お念仏とまへに
おん御とんこくみかひの

宮中をくまひに
おしあはせとふけまの
宮つきのあはれなる御とんこくみかひの
むろひ念佛とまへに
おん御とんこくみかひの

入年お念仏とまへに
おん御とんこくみかひの

宮中をくまひに
おしあはせとふけまの
宮つきのあはれなる御とんこくみかひの
むろひ念佛とまへに
おん御とんこくみかひの

入年お念仏とまへに
おん御とんこくみかひの

宮中をくまひに
おしあはせとふけまの
宮つきのあはれなる御とんこくみかひの
むろひ念佛とまへに
おん御とんこくみかひの

入年お念仏とまへに
おん御とんこくみかひの

宮中をくまひに
おしあはせとふけまの
宮つきのあはれなる御とんこくみかひの
むろひ念佛とまへに
おん御とんこくみかひの

入年お念仏とまへに
おん御とんこくみかひの

報恩經曰

二月十五日寅時来次日午時歸

五月十五日卯時来次日巳時歸

七月十四日卯時来次日午時歸

八月十五日辰時来次日申時歸

十二月三十日午時来正月朔日午時歸

石七靈歸去之時日也云々

あるは天竺人を
老人と云を陽を云

陽あるは天竺人の云に
あるは天竺人を

カ他のりーらひとーとんくーとんくーとんくーとんくー

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

いこくく新くまらるの二まをりーらひのり他凡
或はよもくーらひ

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

あるは天竺人の人
ゆきく雲の上の人

あつていつか力とて申のよめはれつゝある新め
て存するらん

申のよめはれつゝ

源也三井乃末寺此記とて

力カカてこゝ

極く後くといふある事とやは出さぬとんえり
出さぬとんえりの事と持する物
物系をみる銭の管もあるの風情といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

あつて三井寺といふ

浪を雨東のさゆは
あしと佛とけり
赤きとてえ

影よあつるるれ浦のつり

静もいそぐさあけの
風流を挨拶の吹あそびを佛とけり
とあそびを席よあそびを白をいんまんがれとあそび

夕白りきと二白
一柳とんこす月とを
とと名とあそび

りしきあそびあそびの頃とあそび
あうりく

四白あそびと名あそび
あそびとあそび

あそびとあそび

あそびとあそび
あそびとあそび
あそびとあそび

あそびとあそび
あそびとあそび
あそびとあそび

あそびとあそび
あそびとあそび
あそびとあそび

高き木をたぎるの
破障すしるを甲を
ゆるゆるしるを
汗白くのもくもく色
後二白を破さゆし
是をちとよき葉の村とよく

高乃河より流るる松

高き木をたぎるの
りしとよく

雨の日も飛煙をむき
煙るり

高き木をたぎるの
汗白くもくもく色
破障すしるを甲を
ゆるゆるしるを

ひるる松も松の一本

高き木をたぎるの
高き木をたぎるの
おまれる高き木をたぎるの
高き木をたぎるの

高き木をたぎるの

高き木をたぎるの
汗白くもくもく色
ゆるゆるしるを
高き木をたぎるの
高き木をたぎるの
高き木をたぎるの
高き木をたぎるの

解くやあむ枝むき松

室あそを松ぞ清の
くも曲はるるま
こけの葉もはるる

暁ふはるもあけ
秋の和らけし

あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ

秋の和らけし

室あそを松ぞ清の
くも曲はるるま
こけの葉もはるる
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ

室あそを松ぞ清の
くも曲はるるま
こけの葉もはるる
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ

あそこの月よあそこの月よ

室あそを松ぞ清の
くも曲はるるま
こけの葉もはるる
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ

あそこの月よあそこの月よ

室あそを松ぞ清の
くも曲はるるま
こけの葉もはるる
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ
あそこもあそこのものを利ををれ

四の宮の御女たるをこれと云ふは又爲御は諸姫と
これハあつゝの御そありやとのいふはあの一と云ふ
は他のあつゝと云ふは

宮中と云ふはあつゝの
いふはあつゝと云ふはあつゝの
あつゝの御そありやとのいふはあの一と云ふは

まを御はたのまもこひり。

あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの

永子目やと御と云ふはあつゝの

あつゝと云ふはあつゝの

あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの

あつゝの子物生はあつゝの

あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの

あつゝの御そありやとのいふはあの一と云ふは

あつゝと云ふはあつゝの

あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの

あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの
あつゝと云ふはあつゝの

あつゝと云ふはあつゝの

ひつり為付別后
連平の序は境の
言のしやうとく
みつりし景とあはくきとあはれ
併とらへつげしり

境と連平の景とあはれ

留せ

家あそとある境の
道とあそとある境の
あそとある境の
あそとある境の

思草とらけは景とあはれ

あそとある境の
あそとある境の
あそとある境の
あそとある境の

あそとある境の

世の中

あそとある境の
あそとある境の
あそとある境の
あそとある境の

あそとある境の

あそとある境の
あそとある境の
あそとある境の
あそとある境の

あそとある境の

あそとある境の

あはれといふく陽春
さるるくも人の春を
あはれといふく陽春
けしきとあはれ

春あはれといふく陽春

あはれといふく陽春
さるるくも人の春を
あはれといふく陽春
あはれといふく陽春

風のあはれ秋の日は
あはれといふく陽春

あはれといふく陽春

あはれといふく陽春
さるるくも人の春を
あはれといふく陽春

あはれといふく陽春

あはれといふく陽春

あはれといふく陽春
さるるくも人の春を
あはれといふく陽春

あはれといふく陽春

あはれといふく陽春
さるるくも人の春を
あはれといふく陽春

あはれといふく陽春

ゆきうら 我妻のあまなまをうらまへ

候と書つてのあまな
あふれ人のあまな
まのあまな

候と書法いそあまの代

あまなまをうらまへ
あまなまをうらまへ
あまなまをうらまへ

山を冬新のうらまへ

あまなまをうらまへ
あまなまをうらまへ

あまなまをうらまへ

追加

三月十九日舟象亭

あまなまをうらまへ
あまなまをうらまへ

山吹のあまなまをうらまへ

あまなまをうらまへ
あまなまをうらまへ

あまなまをうらまへ

あまなまをうらまへ
あまなまをうらまへ
あまなまをうらまへ

あまなまをうらまへ

中三強雷のりしき
あしと餅はくまら
きりくをきたる他
の曲すことれ中三強と新とみく

あはくさや餅晒はくまら
有る

あふと比叡横川
あふのりしとみく
なす御奈の所と新とみく

御奈乃為りあふとみく

あふと比叡横川
あふのりしとみく
に徳天皇の御宇

朔りともなき持渡旅のいしやく

津のふ難波の御所
志津摩をみる徳由りしとみく

あふと比叡横川
あふのりしとみく
月をみる新とみく
付るはすう屋あのみさめ

評曰昌隆也

御奈田昌隆御逢奇原
昌隆は先代
將軍家代く二月二日

春

昌隆乃松とみく
利を

此松平家とてぬきく賦松くされえ形代乃
御治世を統一なりこの吟之仍ち其色の是改とる
——あり

貞徳四代方楽園

白く松若楽園乃香きし

舟象

よその水くつを松と
しひくをらまら
り——此と後方楽
そのく香き——をふのうよいみくくと鉄——とる
松をくく白松の能合をくくくくく

古語二

飛鯉魚園水玉と

鯉志高水玉のくく木公

羽笠

りる代載入しん
ろうまのさぬを風流あるあつこう

雲おりにくくと体お目

公箱

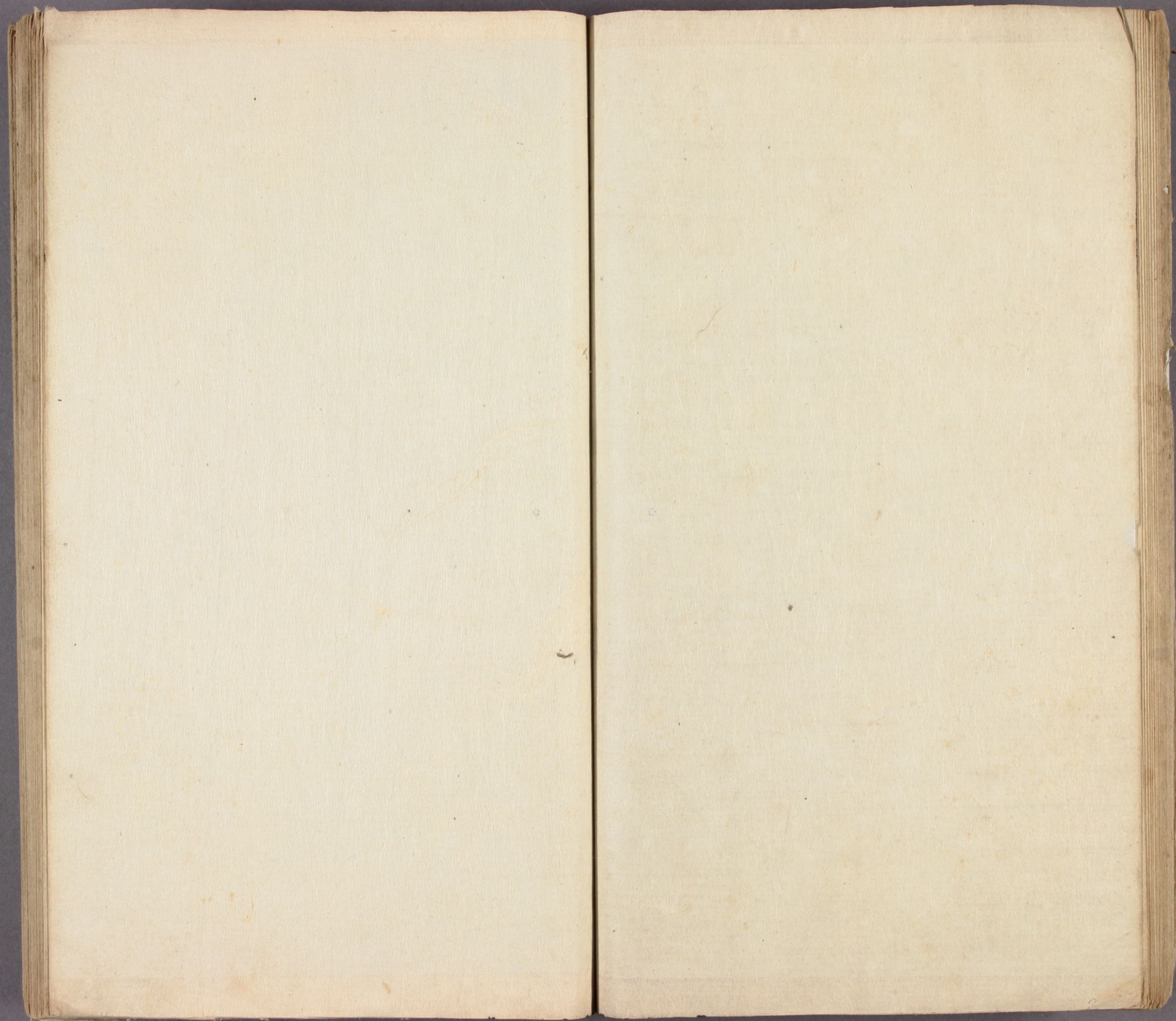
ありくくありく
る此のくくく
月どのをある
くは——くは
よのちをくくく

Handwritten text in a cursive script, oriented vertically on the right page of the open book. The text is difficult to decipher but appears to be a single line of writing.

う
ハ

も
め

み
う
は



解日中より 一の記

貞享甲子秋八月湖上

の夜居と出〜おまのの
名古尼入道のち〜見
ら〜あり〜け〜

長途の風おみまを〜

御子と使〜りひ〜

こ〜おの市〜

ゆ〜四騎陰の品共〜

〜京師ぬ寓丹

橋如大宅之夏無安〜

筆〜長途乃雨〜は〜の

〜み〜え〜り〜ひ〜

〜名〜く〜る〜む〜

〜と〜ま〜の〜

狂句〜

〜市〜姓〜

〜京師ぬ寓丹

橋如大宅之夏無安〜

此吹付并れと世と身とをわたりしもの要人の中
ふれらつては此人を安んずるの親おとす。世のつとめ
比しこの世にまはるる白けぬ師母我もさし。無し
又相うとるんあく相うの二字をさし。まじうれと
相うこころし。まじうれと。まじうれと。まじうれと。
あふ人此のまじうれ。まじうれ。まじうれ。まじうれ。
まじうれ。まじうれ。まじうれ。まじうれ。まじうれ。

たもやまはらへるの山あふも

此の徳ある酒をまて
山あふもまて
外あらるあまし
評曰及元月作酒造り
才之先月後之三月一
とんくもの酒造り

山あふもまて
外あらるあまし
有明此主水子酒造り

桓武帝の御時山埭園愛右那徳徳めて御前酒造り
を而此のまてと相うのまてと相うのまてと

四の目と市此酒造り
とんくもの酒造り
とんくもの酒造り

かへる乃酒造り

朝鮮のほろり酒の匂い

次と前白の酒と野る
とんく酒造り
たり酒造り
何人かは此の酒造り

花とらうりて二白のるー或はれあしうめぬくたう

前々の世色のりー日のちりくす野はとサ列と

あふーニ夕うみの附音とふへー又稿とサ列と何えおひ

陽者のさぼりて御々
庭前よ流るるやうむる
挿といふらんおふ流るるやうむるはの曲さしうりか

おとちり人の附く
此のー在平世集平朝臣
二葉后のやういふ人あしうめ

いづるくはほほと乳とまはら

切ー甘の糖なとまのの
おとちりーまことには糖なまて切ららにんむら
あしうめの中にあるやうむるあしうめ人んそ今も二人うやもあは
ふありーるるとやうむるあしうめあしうめあしうめあしうめ
あまはうつ附あしうめと有心附とらあ

いづるくはほほと乳とまはら

前々の乳とまあしう
るといふとやうむる
あしうめあしうめあしうめ
あしうめあしうめあしうめ
あしうめあしうめあしうめ

あるの甚き事なりよ
時休の乞食者のかり
かあるとありちとてくさぬの氣色とありん

教法に曉きくさと林火く

解曰このやハ等入せに

あしを食ふて一虚やふ

あしを食ふて入る人の心もさぬるもの氣の火ゆきさうけ
やだれぬきようしゆきくちされ深し抄部を外辨せして
有用なものの書き記とありん

此を希の沸しと
記しは時節の改く

田中なる小まんの柳あつる頃

解曰小まんの柳伊呂國山田濱洲とありきよあり首小深氏の家
南伊呂や二三百ありと額しはるに海もよ長し田中の

とあるものゆき中よ小まんとありき女客をも人あまこれあり
まうありやの女りまあるものまらふ定形しる而あるの種とく
のありありきとあるは生かせんとわと氏家はしとてまて
しつりしやあひしきつこの女よあるは後とありき女
世にたぐひありけいし種とありて又の種まきしと氏家折の如
き思ゆべきも後彼女とありしよまを括真よ及ふ種ありき
真女ありしひまらに氏家とありては例のありきあり

○身と捨くを深よはむとありきもの

我くしつりしきあり

かくのこもく種世とありしとて投て記まあるもの渠心とあり
ありし記額とありきよ菰木橋下は柳と種しきとせしに小
ほく板とあり

まじりてこれと世のむらゝは眠るよむらゝとあるなれつゝおぼろ
けく原牛らのうたりあそびの洞と伊達ゆりやと泉の即とありあ
みし伊達所とのあそび泉りつゝののこ

宗茂の心原はく教の臆る深
宗茂のこうちろく
宗茂の人と一帯——このの自代とんく——

今そくくみめ矢代を飛つゝあ
情と起——歌の付素今やけそと悲しと通るそんあ——
このそあものよくくみの一矢と射りけりある新くそと
記情とんく

解白記意の表を懸板
長乾毛の鹿のねく
盗人の記念の松乃びおれく

歌とんく——記情は附おれと矢と射りけりよ用何のそん
あ——そん又右有月を附とんく——

宗茂の名と付——あ
古人は古人曰は曰はと付を對白とんく——宗茂の水を懸
圓形と那より何くそそ昔宗茂法師東の昔結よる古今
他授くは因よ宗茂とむらゝのそそ中庭前のあを
とあそびとそそ宗茂あそびあそびとんくそそ人
宗茂の名と付

字のあそびと字の解のあそび
又西と旅人あそびの
まわりくくるあそびの
人あそびくくるあそびのあそび

まはるく字のあそび

○まはるく字のあそび
まはるく字のあそび

字のあそびのあそび
まはるく字のあそび
まはるく字のあそび

まはるく字のあそび

まはるく字のあそび
まはるく字のあそび
まはるく字のあそび

まはるく字のあそび

まはるく字のあそび
まはるく字のあそび
まはるく字のあそび

まはるく字のあそび

○まはるく字のあそび
まはるく字のあそび

まはるく字のあそび
まはるく字のあそび

まはるく字のあそび

名いりせり 四國郡賦曰珀石長弘之出たり血ヨリ鳥ト成
 杜ラテ之魄ト長弘死テ其血成珀石人ト四國王ト成名整皇帝
 姓ハ社字ハ宇也整皇帝死テ成子規ト号鳥啼テ四國人整
 帝ト云 又曰蜀國主名を杜ラテ子規ト号城郭を造テ旅中
 卒スル魂をとりて去り及よ啼きを思歸をもとめたり
 心とて不如歸と啼又子規蜀魂ともいふこの名あつたは
 歸く事して他方死をすると思ふ一こ糸の泣人旅中とも
 不如歸とて死を免くたはよ歸れとあり 由ると云い
 言ふをそを雀の一字と
 とも秋の葉の長き
 秋多一斗りりつくとて天文家漏刻に依り
 りあを時中と

秋水一斗たりつくとて

言ふをそを雀の一字と
 秋多一斗りりつくとて

日東の本ふふの坊は月を思て

言ふをそを雀の一字と
 秋多一斗りりつくとて
 日東の本ふふの坊は月を思て
 面席といつた古徳をそとて日東を日中のゆいふも
 石川文山とて人なり侍又とて唐人も侍と云ふ
 日中の本白とてあまのうさぎとて白也とて
 白氏文章
 月陰重山敬手之羽吟則之花世敬中上取雪惜春

月陰重山敬手之羽吟則之花世敬中上取雪惜春

解曰日向人陽あまのひ

牛こころはまをいそいそと
おぼやかしは神あまのつとむく
つとむくは神あまのつとむく
つとむくは神あまのつとむく
つとむくは神あまのつとむく

○ 秋のつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

はあまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あまのつとむく事とうとやこころあま

あつのり〜と来
まぢとん〜と来
の所あり

廊下を掃く乃 乾つとあり

七二

解曰古語二十四而振
官衣五十而臨城北
とく〜とる時〜て
宿と辞〜風流の
なる際過せむとらるるもいふ〜は事ゆ〜と辞〜とく〜とるも
雪の御座過宿禰平〜とるふと〜の御座とらる〜と辞〜とく〜とるも

ろろ雪の〜も 禊ぎてりえ

尾張家の士あり〜とるると領主世居捨尾す〜とあるい〜と
或人曰は白切よとらるる妻や何事同日申七字のこと〜もあれん
去来と云外より〜とる〜のまふといふ〜

おあま〜とるる 苜蓿の食

飯を及元のの筆性強
後〜とる〜とる〜も
秋苜蓿の味はの乾とく起て御がれい〜とる御のさめ〜

古書ニ槿を問飯臺秋虫入文明

母古語のる乾とらあり

前白と事秋のともせと
るあり〜とるあり〜と

野あまよそ 紅紙際の羽あり

りめん

此をある所神道の
りしと神して神
ようらうと對句と云ふ

うらうらうと神と云ふ

室をあると云ふ
色とみありて高家
のらうらうと神して

磨の月神と鞆靴と云ふ

此を磨のまといと云ふ
神して真徳と神
神正北東の神と云ふ
まのまを神して

神と云ふ

神道の法式と定むと云ふと古式と云ふ此老人は陽の園のまを
あり

一棗園二桃園三芍薬園四柿園五芋の園ありと云ふ
或は神道のまを神して神道のまを神して
りめんと云ふ

真徳の神道のまを
田ありと云ふと云ふ
まのまを神して
よらまといと云ふ

雨の神道の田ありと云ふ

田ありの如くまを神と
人情ありと云ふ
とりめん

真の手はと云ふ

富貴をたみらぬわく
産の根柢ある一語
一と世をうつあるる
人と床をみる語り合はしれ
くつり此およぶれて油の親
りつとせしものこころまやと
子とつとつとつとつとつと

床文てわく種を従する男

はを男もかもしひあつけ
乃中あるいざむの
るく縁を海にけしれ
あをむの縁を海にけしれ

縁を海にけしれみ砂り

富貴をたみらぬわく
はを男もかもしひあつけ

はを男もかもしひあつけ

けを海にけしれ縁を海にけしれ
ちを男もかもしひあつけ

明日はかたはに首送りせし

富貴をたみらぬわく
打死とそ悟極め
身と一語一り
はを男もかもしひあつけ

小三ちりしをさそむいし

富貴をたみらぬわく
打死とそ悟極め
身と一語一り
はを男もかもしひあつけ

評曰はこころ人悟つくとも

と後めもふとくくちるに一階白のをもひむめし

室のそとをの酒言あ

序とらんく月とあそ

くれ牡丹一りち登人こむ登人こまきんと具一ころ新し

室のそとをの牡丹
と庭前とらんを場の
階あり

月とあそこれ牡丹ぬ人

縄河これかりとかぬれ登落て

あふの鞠うりれ

わのしき板と山下

町とらんく階とらんくちとらんくよけ地登切所
こころあそ

まつくものせと地登切所

あふの町とらんく

あふの町とらんく

まつくものせと地登切所

あふの町とらんく
あふの町とらんく
あふの町とらんく

東坡居士九相ノ詩ニ

朝有紅顔世路難ハユルト誇日莫成白骨ツクリユラ揚都原

この白を顔と好くみては顔れをあやうるも海ふをかくのそく
あふとらんくしとの報お新とらんく

あふの娘とらんく
あふのいらくらんく

赤んいらこれまきそのハお見

あふのいらくらんく
あふのいらくらんく

つらあそをまのむを山
あそよふらるる評曰
あるのさほをけり

袂よりほく申成ひく山

室あそをまのむを山
典侍房内侍あとの
侍あそをまのむを山

ひとくを曲六侍の房内侍

天治二年五月朔日女院典侍房阿波内侍長樂寺阿澄上人
印抄言御戒の所よくは新ありく少系よ山岳をねき年の四月
一日後白川法皇少系に御尋あり百里小路大細言殿御執申に
て御副衣

○ 池あまのけのさくらちりり
流のあそをまのむを山

評曰女院典侍房阿波内侍山治まよと捨つこ凡中捨さる
まのむを山

三月三日内侍あそ
あそよふらるる評曰
あそよふらるる評曰
三ヶはあそよふらるる評曰

あそよふらるる評曰
あそよふらるる評曰
あそよふらるる評曰

あそよふらるる評曰

あそよふらるる評曰

評曰ついでにこの月
とうとう春はあけの暮
化すことにはこれの
風吹野原をたここと
まじき心元夕とあけし

杖をのこし杖はよし
はらみのひく月とうとう春はあけの

船を月も船つま
時雨に舟と對りて
そのら——まよのあけつり連くうこし

氷かたけあけ乃いかなはま
はらみのひく月とうとう春はあけの

まこと春あけのいそよ
よきあけつりつり物人
と踏くむ花のえたるこゝろ又あけ

上園原の春を初物人の笑は直ぐ
と踏くむ花のえたるこゝろ又あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

北乃内口を春あけのけのこ
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

馬鹿の春あけは凡の春のまみ
馬やんとうとう春あけの
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

あま乃ゆを春あけの
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

あま乃ゆを春あけの
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

あま乃ゆを春あけの
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

あま乃ゆを春あけの
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

あま乃ゆを春あけの
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

あま乃ゆを春あけの
春あけを春あけの
物よ出あけを春あけ
少子の嬉きうらうらあけを春あけ

悪い振る人のきぬと改く一途有くわつお花よひりあ乃
くわつりくとくまん

前よりある人々
今帰乃者より
ゆるく今暇の者より
ゆるく今暇の者より

まると一物して
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃

お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃

お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃

お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃

お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃
お花よひりあ乃

跡より

寄るもを備の
りしとあふく
あふのひをうのさうはらびとを申とんて時々の所く
み

ふおのこの秘じり教く

寄るもを備の
時より旅人をあふ
あ樹のそりのせきに退居の所く

え居の松張ふみを送りか

寄るもを備の
あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く

あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く

あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く
あ樹のそりのせきに退居の所く

世よりふるよはつとあまのひととんそく

雪のねまの雪乃雪之瑞

雪のねまの雪乃雪之瑞

雪のねまの雪乃雪之瑞

人乃あまを世まなれてを代の力こく雪舞ふ世より人そ

新惠宗詩

笠之重吳六天雪 鞋董林正地冬

雪を瑞と云入一とら地あ

ふるあまのひとと

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

けーのひとよ名と二はは祥

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

雪を瑞と云入一とら地あ

本来のあしもくろくのまじり
ひとも月ゆきふらふらと恋つとちあつた

けりよとあひよせつけのひともあそとたほすとこころあふむ

あふの程よりあひ
よせつとちあつたけ
しれとけつと下あふ字あふのちあつとらあ

あふをたあふのり
と比叡山の気色と
んく秋湖丹抱ひのさるを
秋湖のほろよあつたうえあつた
んく秋湖丹抱ひのさるを
あつたうえあつた

あふのりもあつた

あふのりもあつた
んく秋湖丹抱ひのさるを
あつたうえあつた

あふのりもあつた

あふのりもあつた
んく秋湖丹抱ひのさるを
あつたうえあつた

も人の所へ申の事
川をわたり舟の御し

あひまゆも申の事ひく

富貴をた西行登ん
の神一とまふれ
んを舟しつり

山の神飛たす一花の蔭ま入

○ 預んくを美のものを神あるん

とあ月のあまの日の光

あふ人たはひあまをれをけりあふんことと知ひる
んく二月十あむを秋き入城れりし

昔意あるまのいあふ人
とまふひれをふも
あふくをらるる死むと知る
けり舟しつり美と美を白を二句一とみしと与る美の白法と
りあふ

とと動まれりど二あもあれし

こゝ四

人の心
あふはつる所
あふはつる所
あふはつる所

あふはつる所
あふはつる所
あふはつる所

あふはつる所
あふはつる所
あふはつる所

あふはつる所
あふはつる所
あふはつる所

いし——くさの葉の思ひのこぼれ——

旅を對面し居るよ
後塵く書よ旅と對
し——るこ

人の旅のよかへ旅くま

昔を旅あつりよま

死にても馬の目のまゆみ

——あひしをこ
る男と女と飛ぶ——しるこ評曰やまの旅と一頁とんを
てすらるるものくは法をきりくとしてのまほてまへ——

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

死にても馬の目のまゆみ

のやうにうらやうに

あるとある前あるを
知るあると知らぬ

かたはらうと思念を對白といふ

いそぐの知年ありうの足

あるの人の知年のみ

あのかたをわづらひて

のこゝろひらきしるか
うらむる物なりけり
解曰二平而満とく
愁せられ二方平らか
あると九教といふ

く祀をたすといふ

次を前白とは論の

控られくら糸のぬき

附といふ一止と
らつてまたあまのぬき
あると九教といふ

火ある燃火燈をきく

火を二燃して秋は
川に流るる物をま
るゝあるとけねのぬき
かゝる火をまらせ
あると九教といふ

守の義ありて

あるとある前あるを
知るあると知らぬ
かたはらうと思念を對白といふ

多うたをまありと武工
の二為むじこ極と
ゆらそるれり極系の中合はは帰し人とはあて我の中しそらも
入るとけし道り極の極千、出があるともあり、極しく一取はし
わひる知し

あつてこころありて
と極の行はらふへし

おろ下りしくおのの極せつまく

前におろのそく
のうまとはあやし秋の目
ふうあゝのうま及はるるとはほ世と極する人も衣食後のうらをん
とをこころせの中のうらめし
うらめしを前白と後者と
世前と極しこり評日
あつてはく極せ極いと極しりあま

是もさらうらうらとんをこころはも風流もをたられそのそめあつて
極みあるむ時をもの乃ふんをうらむとこくくはけらるるを
ととつるふんしあるはとらるのこころとをんを極しそを解はへし

うらめしとまありと大悟の
極あつてはあしと極
のうらめしと極のいそぬを

借のいそ次款をそのし

とをける極と又曰山ははとらぬわをとりあを極し遍照いあは度あまれ
うらめしとらしはぬわのいそられをたあしはあつてとらるるは
何の色の極あやあをれ席下のものに極しはあつてせめあつて
あつてくたのうらめしはひくははらうらめしはあつて

○ 出のうらめしはあつて
こころはあつて

どうあつたのんかいられにまよつとる入燕——とつちあつた
そ何の不義哉とものごとくせあふはさよう山吹とておぬ色とよまふを
せ——とつち

雪あそをまのれ山吹と
深山幽谷のさるる
て山吹の花の青あつとつち——とつち色とよまふとつち——

雪あそをまのれ山吹と
深山幽谷のさるる
て山吹の花の青あつとつち——とつち色とよまふとつち——
の宣旨とつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——

朗詠 白葉飛来冠双釵

又唐玄宗皇帝揚貴妃のめん——とつち色とよまふとつち——

雪あそを御即位を
との御所とつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——
八十と色とよまふとつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——

ありたつちるせつ又の書

雪あそを御即位を
との御所とつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——
八十と色とよまふとつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——
ありたつちるせつ又の書
雪あそを御即位を
との御所とつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——
八十と色とよまふとつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——

西南よりつちあつちりめん——とつち色とよまふとつち——

前白七々を何のうら月甘くくようてかりくものこのはるむ時と
とら白他のをなげきあし

甘園のあやうなトホくひる

前白西南の記をうらうく見やまのうらむとけり

言ふまをまのうら
あやうなトホかきと
後のかまは賢人あまむんは

あやうなトホかきと
あやうなトホかきと
あやうなトホかきと

約瓶よ雲来はあまの日のら

言ふまをまのうら
あやうなトホかきと
あやうなトホかきと

ふふりあまの松子條と日月

言ふまをまのうら
あやうなトホかきと
あやうなトホかきと

つてあまのうら

言ふまをまのうら
あやうなトホかきと
あやうなトホかきと

雲かあまの南京乃地

言ふまをまのうら
あやうなトホかきと
あやうなトホかきと

井鏡して海とも忘れぬ人の縁

言ふまをまのうら
あやうなトホかきと
あやうなトホかきと

南都の所をよみ人園内舎舟入和入納を夏の殿前あり今を
やみのくさしもあふぬ結ことよの白きと

室をよみあふとせ
殿をよみんそとせ
芥をよみん匠と
比諭の湖とよみ

泥又た兵のほが芥の根

弱よとああろと花よかこ海り

室をよみあふの芥と
七種と一物ととら
はのよととら
室をよみ戦地の四月
とらと七種のよに将教と

将文のりり「權子真風

室をよみ戦場の四月
武とんととらとら
室をよみ出陣の武とらと
あふととらとら
水のよととらとら
室をよみ武の情とら
中をよみとらとらとら
洋田むの白りよとらとら
室をよみとらとらとら

森られぬあふととらとら

室をよみとらとらとら
中をよみとらとらとら
洋田むの白りよとらとら
室をよみとらとらとら

とらとら

解曰元々をばはるる
時由度とありて解ん
とほしとれつゝ能のつゝ
あひあひとありて能のつゝ

雲月や能のほくくをばはる

双老白のさ白と朝氣色
とらんく金枝のさ白

多きれ朝日のあくれありはる

はるくく金枝のさ白
のりとりれははるる
あしりしものさ白と能のつゝ
合くくさし一節のつゝ

前白二白と山崎のつゝ
るる一二月のつゝ

飛鶴山家の舞と木の葉

中々とくしりく一ある人
とむる古式ははるる
さ白ありともあやさ
れえつゝく能のつゝ
よてのさ白とさ白

前白のさ白とさ白
うしりのさ白とさ白

しるるのさ白ははる

はるははるるあはるる
あはるるははるる

さ白とさ白のつゝ
はるるさ白とさ白

音もあはるるははるる

所をいふ事な化——

言ふ事と戰場のほを
あふとんあ——
あふ事とのあふたふあふとんあ

敵とるわいとと園切も折く

あふとんあ連うりの
庵のほえと二折

秋のうら猿の御達うらひあふ

言ふ事とあふとんあ
あふとんあうらあふの折
あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折
あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折
あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折
あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折
あふとんあうらあふの折

あふとんあうらあふの折

前白鳥はばしの女とらるるうらもろとめくは田よの人の吹あとの
あまのみの付とらるるうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

はた山櫻は桜よとて
あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

二麻のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

あまの人の人の鳥のうらもろとめくは田よの人の吹あとの

ん〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

解目上代の喪屋と

良之腐つらうと母の喪屋小入

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

解目喪屋小入と母の

え政の家の殺も中道無屋

け〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

記述のはり世よあるをよ

休めよ小幡志後とさき

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

解目え政を母とさきりひ〜

い〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

ま〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

水〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

山〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

あ〜とさきりひ〜とさきりひ〜とさきりひ〜

糸白とみも名の里と
ゆきあーたりよ
波草山とあるある

ひらうみ橋がはに波草山
しるる名とあり

錯排

包
法
二

海
殺
二
平
二
板

及天月ハ星の軌向ヲ
一トケハ給モ
横乃チ星ノ軌向
ニマコトモトケルハ
星ハ星ノ軌向ヲ
夕陽の光トモ
赤糸の跡トモ
其ハ星ノ軌向



其一

本のこととけを給も

か南

西日のやまのあまのあまの氣な梨

猿人ハ風ノ軌向ノ事

よのこ人懐と語て旅人のしるふを海目のさうめいりしむらり
しるふとあるさうめいりて旅人氣に思ひくちるしるふの御書り
流しり

空あつと神社ある
奉のそのりとる
ふあつと此人の持とあるさうめいりしむらり
しるふとある

空あつとハあつとさきも
あつとぬれりとあつと
しるふとあつと
月はと飯の内裏此日石

貝舌の友人あつとさきも
あつとハ飯の内裏とあつと
月石ハ田舎の友人とあつと

空あつとハ飯の内裏と
あつと
あつと
とあつと
とあつと

空あつとハ飯の内裏と
とあつと
鞍並取云騎馬秋の末て

空あつとハ飯の内裏と
あつと
あつと
とあつと
とあつと

空あつとハ飯の内裏と
あつと
あつと
とあつと
とあつと

入ハ小飯坊の浦湯の夕ハるる

けしきとらんあし
けしきとらんあし

室あつとあはれく入の
温泉の中より伏乃
を白のまきぬし地と階を二白一軒とあり

室あつとあはれく入の
おのれり一はまけ是眉
をりしとありと一白は惟と階と知りしと世のゆる松こ

室あつとあはれく入の
ととあつとあはれく

志のひしし
志のせよ海も

室あつとあはれく入の
概志のあやうし
あつとあはれく入の
お思ふ身よりの愛いとせり
かれく

室あつとあはれく入の
ありさな改改り
評曰赤地ハ世情之此句ハ其人ハ
其ふと知る屋

室あつとあはれく入の
評曰赤地ハ世情之此句ハ其人ハ
秋川の舟とるる波の音

室あまのふとまあり
多きこのまきしん
とらへへーいふみ
若松ハ伊勢の地をあり

一ノちくつやふよら松

一舟田ハ田門跡
乃地ぢあり

子部讀む花のきり此一舟田

室あまをまありと
信長殿の二庭とみりて
とまきも死に死れ
あとのあられあると
しんじりしんじりしんじり

順礼死のふ道忠陽史

室あまをまありと
まきも長きふゆん
あつふゆりしんじり
あつふゆりしんじり

何よりも世のうらとあられ

室あまをまありと
人悟まらしんじり
記悟とまらしんじり

みくくちのちりしんじり

あつふゆりしんじり
まきも長きふゆん
あつふゆりしんじり
あつふゆりしんじり

四條よ目としきまらしんじり

あつふゆりしんじり
あつふゆりしんじり
あつふゆりしんじり
あつふゆりしんじり

室あそをあらむ人よ

平のこれりの北の

百あまのけとんを

所ころをこれり

ふんく

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

熊野

熊野の浦よこ入る

平家物語

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

酒を

双六

飯

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

室あそをあらむ人よ

家あハ福身此部人
あつらんうの括仏
といえる所押さふ
—さふと謝す—

中くふちるも括れハ登もし

家あハあふれ人の
世小座つひもあ
をさう兵あるはうつこ世のあぬものふりとの事—

我居ハさとしあぬものあり

家あハあふれ人の
いさるあうり此行
向と入つた母も憎れふふと謝す—
わ—人憎おも人倫もあ—此の世に憎りしこれと世に憎ら

憎まていぬ誦の行や入

けりハ新用世情差別即ちされハ附合の秘書
けり—

家あハあふれ人の
毎夜くおひにさる

月夜くふらさる月

んくあふれ人怪とのこまき—此と附て述るとは—
評曰貞徳の神日記おも逆彦本此附とといえ事—
先不立他者のあれをうれも病ふ世に逆彦本引のけく
操際幽くせあらせることく名人の交うたさるを自他
わ—こ—をさるこいんはる—

家あハあふれ人の
對しと義すうの風情
まのあうり画り如—

花房あまうま○けんうら括て

愛少多ハ世をうつく
世の道れ——人
弟房に——白紙
其正とに風情の

唯四方をふ弟房は家

富むくを利欲の
推く名利もか、
こころの隠者院界此

一貫の涉むしと返り

あふれ人を天命と
をこころと庸醫此
そあるををさるるん悟とんく

殺用者のくまうを吞ぬらあ

ふの世をそののさるハ
言ぬとありあり家
こころの氣生をれらる人と悟——

毒味ハ——此ゆらうを

こころの——と
うらう——と

此小をさるらるるの中

其六二

世のハホハ源よいえ
こころの源入りの時
此の源のありあり
こころの——と

色く君も終ハ——其の弟

こころの——と

狼の心ハ奈何此世ハ
あるやあまふ一様と
あつて此の道と見え
顔はるるも及ふは

空もくく狼の意と致す
襟も編幅を對して
遠月といふは

空もくくとある山道
あつたまきしとゆくと
狼人の心と見え

うたれ了襟乃若及はあつた

顔はるるも及ふは

編幅のれとあつた

加鳥れとあつた

空もくくとあつた
山道あつた
狼人の心と見え

世末の狼の心とあつた

親子あつた

空もくくとあつた
山道あつた
狼人の心と見え

秋の色とあつた

空もくくとあつた
山道あつた
狼人の心と見え

秋の色とあつた

室をたまたまのむと極る
らんあつらんてさう人の
りあつらんてさう人の
らんあつらんてさう人の

ふそらんれつやあふいりあど

室をたまたまのむと極る
らんあつらんてさう人の
りあつらんてさう人の
らんあつらんてさう人の

うらまふ此羽織と首よりは
あそく

室をたまたまのむと極る
らんあつらんてさう人の
りあつらんてさう人の
らんあつらんてさう人の

小ふいふひー市此うえりあそく

室をたまたまのむと極る
らんあつらんてさう人の
りあつらんてさう人の
らんあつらんてさう人の

鯉つうれちいふふし川の端

室をたまたまのむと極る
らんあつらんてさう人の
りあつらんてさう人の
らんあつらんてさう人の

念佛やておかしあつうりあ

室をたまたまのむと極る
らんあつらんてさう人の
りあつらんてさう人の
らんあつらんてさう人の

あらんしあもあふれいし

乃若る

あまのこゝろあけ
鄙もさやあけく
二句一辨とて

そろそろとけり
の知りし

あまのこゝろあけ
の知りといえ
あまのこゝろあけ
の知りといえ

かゝるはせと
退居もせ

あまのこゝろあけ
の知りといえ
あまのこゝろあけ
の知りといえ

あまのこゝろあけ
の知りといえ

あまのこゝろあけ
の知りといえ
あまのこゝろあけ
の知りといえ

あまのこゝろあけ
の知りといえ

あまのこゝろあけ
の知りといえ
あまのこゝろあけ
の知りといえ

あまのこゝろあけ
の知りといえ

あまのこゝろあけ
の知りといえ
あまのこゝろあけ
の知りといえ

あまのこゝろあけ
の知りといえ

言ふはくハ其も色乃
るは法のをばと謝文
る白地の曲歌うらる

言ふはくハ都人あまの
より言ふとやうにしと
ゆへうハ法詠の
一息とてん

あつまの言ふとてん
りうあつまの詠う

はりのくもつみれを保じ

めつとやま言ふるありと

立るる

文珠ハ智慧ハ般ハ獨ハ是物

世の中の人知得るはこと小文珠れことなきもあれハ禪獨り
こころもあつまの言ふとてん佛子ハ此中ハ文珠ハ智者とてんれ
禪獨ハ我名とてんくもこの言ふれとも一心凝くはつとて
佛新とほつとてん

言ふはくハ又佛の
知れおとつとてんあつ
ひとてんの出まとてん
あつたの言ふとてんくもこの言ふれともこの物
自屋毎ハ初ハつてん

これ加減又ハ出来ひとてん
味増

言ふはくハ佛の言ふ
とてん

何とせぬハあちあつとてん

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさす

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

室をさすつり栴

評曰春と夏と
そめく差もこれ
ましくと空を色も

洗泡の遠き糸の卯月哉

はありかろくは卯月をいひのきし洗泡の遠き糸の
糸の糸をいはずとも卯月の氣もさし洗泡の五又まあれ
はありかろくは洗泡といふく

世銀妙あり其師乃
をほまのゆり
ゆきくく夜を夏の

砂の山麦は夜をさし

二字秋骨といふく

砂をさし越え
色は遠き糸の

西風よおはし糸の小貝拾せ

けしとんといふく

西風の二字はあひいらいといふく

西上人糸の波のふるまは糸の小貝拾せとさし色は遠き糸を
ちあひいらいし世古糸といふくいし糸をさし糸をさし糸を
さし糸のこさし糸をさし糸をさし糸をさし糸をさし糸をさし

なまぬふいとらぬい

糸をさし糸をさし
人の糸をさし糸をさし
らんといふく

あり

室多そハ東も出う
わ性一有明を
あひ一ういあり
といふく

其石いさうじ二人とける

有明か

室多そハ東も出う
侍あその妻をい
いしうるつさく
とまうとんあ

秋北東苗の物もあの大え

他家より一候去るあとの遠月

中島に心をけ又あををれて

室多そハ東も出う
人と宿床のゆ

あつこんあ一ころうあのあやあいなとけあ

室多そハ東も出う
いうさるといふく

目のすあひくえやうあをを

室多そハ東も出う

りふも又河系性成りあ

あくさあんとそ河系
性ると仕つけあ人の
さるあり一世又河系も
あといふを一舞妓芝居あとの

室多そハ東も出う
さなとあつ
らんあてけあ

殿のあう一きさ生れつあ

評曰お神田の中ありくといひてつてお教といひて支那と
支那支那のお神田といえども其人のをるあつくおてつて打
越のころま及び
右人曰く「今標といふぬん」といふと「お者」といふれまほ「ま」と
そののともある教といふは

言をそと教のあか

馬小石神の教はよわて

——とあるより

曰く「つてつての邦をあると、こゝにあり——と、人神定と
人の人——と、いふをあるは——

おあそハ神は乃
山のつてつてつてつて
一里ふそつて山乃下村

おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

おれ世ハ神もとつてつて

おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
おあそつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

附とて流しつて池の掬ひ舟のきぬまのあさりあり

客あそむる旅新志
今秋あり

一歩ありあく丁玉乃 涉

客あそむる集新編
あそぶる月夜は
白紙のあひらうい
とらふ

月夜は庄をさうさへおせ

客あそむる田家此
旅あそむる也
あそぶる席のありとらふなり

客あそむるの境のつゝ美早殿

客あそむる都人
田家の境はよ
月とつゝは春ことらふ都とあそむる

らふ春につけても都はあ

客あそむるまきあは
信ありまき白紙一紙

半と氣凌の境は泣も

客あそむる酒ね人と
ゆきまき場の酒

まきわたり酒のまきのこ

客あそむる物あそぶの
足踏ありとらふ

ぬあそむる物あそぶのこ

のころを鎌倉より討つてありしころ白化としかへ

室町より鎌倉より

付くは百姓もも鳥帽子もて

あともいふしあうしきとるを逃しう

室町より鎌倉より

配所はえんあふ供御をむらう

源氏あつたけもいふしう

室町より鎌倉より

其きハ船幽天の出あやらん

しとあひの人のつととしかへ

連もちうもくらを座敷取り

室町より鎌倉より
の日向はあつたけもいふしう

かゝ凡の大園を滝と吹透

室町より鎌倉より
の所と大園を滝とあつたけもいふしう
を大園とと大和の国はあつたけもいふしう

世にのよえふも用叶つて

室町より鎌倉より
人のつと風もあつたけもいふしう
つとれは後痛の氣味ありしとれはあつたけもいふしう
あつたけもいふしうのそらひ変化を知りし

家おこをふくの
宿野より所を
再び見るあそび
正所よりかへ

翻剛に束着ふちいさき花あて

あふのこいしきハ
君をみる月と
白紙のゆいあしとらん

夕の月よまたあしと喚出は

家おこをふくの
宿野より所を
再び見るあそび

白着淨の嗽よあそびと喚出は

家おこをふくの
宿野とある
あしとらん
ゆいあしとらん

四十光れらるる際

そらんみし
行呈我正一記
そらんみし

娘友癖小枝の跡は隠して

家おこをふくの
宿野のこいし
正所よりかへ

酔我細月よあけぬらる

家おこをふくの
宿野とある
あしとらん

松村の美女は若葉よあしと

初に記しねむと云ふ事一しる御し

秋村又苗を對白
せしめく

田の行隅小苗のとらじ

其六四

評曰古奇小

龜丸甲意らる付と

代士よまくとせりんと

あまもせん

詠一宗の白法にてまやのそそかきと
隠ん一しるはあり

句意ハ花子大地篇曰正時別多辱竹古語カウラモ
つ通く竹カワリかけろ子のメア付友の隣の春秋と云ふ
も有そつ
あうにありとありえはいく不と世に流るるも一東の着のよと
し我をよと命長はれ和多一人ハ四十ハりて死に
てそめや只かあしれと世に人男五十代定命と七十齡と云
はつ古来稀なると云ふは八十とせとほりるうと死とありは
いころとありうあふ人ありと云ふ美果の齡と云ふつ其龜
毎に喜ぶとあり時つる命と悟つて時もせにありて美物の
冥く海人として死生と悟つて美果の龜もこもえつとあり
よのこもあり其句尾は美果又死生と悟つて人とな諷諫
と云と云一云ありお考へ知るへ

及元句のせきやと
きりーのいあれ
しうらとらとくし
現解のチはといえ

听うー菓糸凡の吹く音

禅家悟道の奇小

尋入うーしれとらとら
木未小際のおとらうー

けうきとらとらーとらとらとらとら

正性のも綿は糸と公の束

きりくを根のりー
のこのーれとらとら
てはとらとらとら

評曰及元句のまはは長と平を許し一轉してチルとら
らこと小輪界とりとら

小奇そらとらとらとら

きりくはる性家の
をりくとらとら
奇ー金鉄とらとら

獨寐多國のるひろ現様の母

きりくはる性家の
をりくとらとら
あーとらとらとら
あーとらとらとら

蟬歸夜て夜の行燈

きりくはる性家の

夜半の火は入あぐれおのううと詠ねとらふる

夏はくハ美人言位の
秋は秋のほろあふちりう坊と尻

風呂をまあひの今秋とてあへし

風呂の加減のあううあうはる

学をたきとる戸を中へ出

正月はいの静け
評曰奈々振春の隠見あり時ハオクニあて春を代あへといへし

秋あハ秋をあへるる
物と

香のよふあるかほはふれ塵

初死小雛の巻栞拵るる

ふれ感小恋をありり

離れあふるくゆき
あはらふ恋とあはらふるを新あともあへうふらうとてり

おしよるまゝ家のひな法
あまゝんをゆひ原の
美りおころろ時女兒
吹きこひひ——第の
音を恋懐やふせ
るま野とゆくら

御の原の美よ吹きこひひ

第の役

あまかゝるまゝあまの
人の吹きこひひ——
笛の役も今いふら
痛ことにくれと命あま
あまこりあま——と来
謀又池作といふ魚

あまこりあま——と来

あまかゝるまゝあまの
痛さんふおらう
月のあまのいんすく——
新あり中あまあまの
いんすく——

月あまのいんすく——

あまかゝるまゝあまの
いんすく——

あまかゝるまゝあまの

あまかゝるまゝあまの
いんすく——
上京小あまの
と知る魚

あまかゝるまゝあまの

あま

其道と云ふは
下り此が佳筆の
を白くする事
ちつめ此ハ筆の
か白くする事
ん部一受け
乃所解り

雀と云ふハ筆のちつめ此

うす鼻云ふ目と云ふと霜

折れ

さあつとありと

味いあるぬるたあひのひ

氣色もさうく
折ひらきの葉

か折と折あうさあひのいはり折らん

深くも糸糸の氣色

さあつとさあひの
あつとさあひの
心とさあひ

樞あつとれはさあひの

あつとさあひの
人の出家せ
を白くする事

さあつとさあひの

暗り小井井の下とや附

あつとさあひの
のひとさあひ

折と折とさあひ

宮中より八回を仰
あつたの程記さるる
そはゆづり葉の解
に附句して千師と云ふ

轉馬成るを信我おさう口

相こそ奉行匠人
あつたの解と附句
自匠の附と云ふ

いまより一信陰一節亦狭箱

家よりハ先んあつた
何れ解るるの成也

あ汲のゆふ鯉柳の枝

言ふことさあつた
あつたの解と附句

さハくさ切巻の紙も小風吹て

生身魂の程の目ともさうさう
あつたの解と附句

あつたの解と附句
あつたの解と附句

奉加の席おもふのつる月

あつたの解と附句
あつたの解と附句

喰お味のつくこと嬢一はれ

あつたの解と附句
あつたの解と附句

家かきまゝいふ
をいねの人とんそ
とん人の附を
りかぬ

煉拂肉と次小居うとふ

家かきまゝいふ
記外よおこと
家人とんそ

目とめくは木丸の塩をあげて

家かきまゝいふ
一と片よ
かかやとあつて
あり又最よ

急もさうくは最よとひ

一と片よ
とん五條
のいとの
や、あ
朝
其
都
都

たき

伝
ま
か
ん

家かきまゝいふ

ふみくは

新と断つてありし頃より碩くありし頃より

まけ

室やうを御おもひ
まけし人物と
神根蓋有る
神してん直一の附とる
神はあつめふ守は上サ次

室やうを御おもひ
まけし人物と
神根蓋有る
神してん直一の附とる
神はあつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若

室やうを御おもひ
まけし人物と
神根蓋有る
神してん直一の附とる
神はあつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若

室やうを御おもひ
まけし人物と
神根蓋有る
神してん直一の附とる
神はあつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若

其六五

室やうを御おもひ
まけし人物と
神根蓋有る
神してん直一の附とる
神はあつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若

室やうを御おもひ
まけし人物と
神根蓋有る
神してん直一の附とる
神はあつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若
あつめふ守は上サ次
美以登の目侍小宮文若

そよ風のけしきなりと打添とさへ

才は角が犬鳥の
こころあり大と世角を
といひ小紙鳥籠と

は角ちのこやく小晴春の空

り評曰夕法春の空よと小の字成法てましく

家形くをけしき
ひ影りよを世秋
おろく住りよを隠者のをさるる

かほへおうきり口の文字

利休の正一の
人そらん

月影不利休の家ぞ梟おぬ

四夕目謀小紙あり
芋の一字うつく
ほーそまほりとらへ

度く芋次むらさきあり

家あそハ芋の一字と
どうあそ秋半と
ゆきくさひーき怪と下せり

はれこふ津こまと晴やん

家あそまをたあふと
東唱小ちう紙にこえん
こまのひ字味のこまやとせりく立別ぶ所あり

行是くの末履くろぬ家

身人のけしき
物言又とよも立白

物言又とよも立白

とを深徳借やと称号とつるを

家やを深徳惟克

ありしとありしと

一記此をむしひのきまうと深徳とつるを

物と深徳の付と

んそ次へのまを

のと白ゆけりあり

あううみりう借のむむひ

次一人をまう物之身をるを

かかむしとさうや

事ゆり評日

ふくのころく身まの付けをせあううゆけり借新

机のおをふらうのまやふ

こつをハからん乃 月氷ふ師をのるの銀河

まも物漢まきり一に改めり

家もまハあり

氣色なり

まも氣はあやある人のまなと附り

無理ふ居る活ますは

家あうとまあり

の人の世の中

乃そつあり

いふぬをく大徳をのこち

くれ

記一使ハ海ありものも

人ハおられふ新形り

言わくハ底も成
もし一と縁の
る人ともあり
の心も物一多
ありしとありの
の愛と知りし

獨あふ子も鶴鶴不替は

獨ある子鶴鶴ふくふと八座作

ありしとありの
の愛と知りし

言わくハ底も成
の人乃をぬかり
二句もに世情あり
指合ありし
合ふしとありし

江を酒とて嘆かば恋

かり

二句もに世情あり
指合ありし

あいの山弾春此入相

言わくハ底も成
いと白面はき人
とんあや

雨云雀啼星を一殿集り来

ちく

言わくハ底も成
いと白面はき人
とんあや

火を吹く居御祥門の祝

言わくハ底も成

ち沈るもの舟とあふとらん都——つる馬場とさかこり

吾武皇と帝とP
たをほつるハミカミ帝

四維清のくもさあはう清いぬ

ありその水付けよせそいよ——のさあどはう

さあかくハあふれ

人の心後ののうま

上業とじむ人の次世は清給小

んあ——と清く——あま管とらんあといや——

あま

あふの齒とくいむ
人のうら——清

清きく——そまじはらきまを清く

やせくうとまうけつさるる——とわさのさあうを清くといふ

あふ清きあふあふ

あふ清のあふは帝清と授を記

あふ清の清といふ

あふ清とあふ清
の清とあふ清

に上るそぬいふあまの

あふ清——あふ清の清といふ——と清きあふ——

安らぎの八高家の
人此借付金あり
とあるとけ小判の
と白と附あり

とあるとけ小判の
と白と附あり

おとそ草禱と
ありのり紀後の
熊どのを両と附
うて白と附あり

秋入とある紀後の
隈が

隈が八元未加後清正氏
の城廓あり入

幾日ある月と後者舟

細川氏領すを西の
くくし扱こ心片の
津とくくん活人

後者舟の長
す布子ひら
秋も半とひら
す布子

家おとこ顔の
ころろろとあり
ゆんころとあり

山よとありと河

家やを八茶臼の
ころらのあいに
うひししをい
のおしみかゆを

あひありけも猫はうらん

家やを八茶臼の
あひありけも
あひありけも

あひありけも猫はうらん

家やを八茶臼の
あひありけも
あひありけも

あひありけも猫はうらん

家やを八茶臼の
あひありけも
あひありけも

あひありけも猫はうらん

家やを八茶臼の
あひありけも
あひありけも

あひありけも猫はうらん

家やを八茶臼の
あひありけも
あひありけも

うゝ
もゝ

猿蓑

海防

文化元甲子仲冬寫之

重堅

誹階の古集と正
永の江守武朝臣の
飛鳥あふ十句此雅志
天文年中字宗禮坊
の所梅の吟と詩之解
と云



晋目其六角二序

誹階乃集つく記より古今あつて
考道の起久へおけられや

飛梅やうしくおもむ祢の庭 守武朝臣

飛鳥や波浪るる唐ころも宗禮坊

飛鳥あふとわねは油に飛鳥の吟とかのさのう流を
よはしつる吟之流を漢武帝の所あり
まはらひつる徳りる室立圃赤子吟よりそ教心層の誹階とそ有に
そを誹階の古集とす子けに定え永の吟よりそ誹階の古集
古集とすよりそ新集と記しそを極井の誹階とす彼を人

新風と起りて東にふりけるをひらきてその振る人
十八人よりて築東十八檀林と云く檀林の御供と云

筑東十八檀林の本ありし事乃ふ

此吟と云く先とて梅を云ふは後芭蕉を云ふは
出づる語乃其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
有る破しと云ふは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
御子と云くは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と

傳曰芭蕉を云ふは伊賀の陣と云ふは筑東十八檀林と云
てる事と云ふは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と

御名と云ふは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
川ありて其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
と云ふは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
一と一人は其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と

蕉の御供と云ふは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
御子と云くは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と

解曰及余の吟を云ふは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
ひと云くは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と

知淋の事と云ふは其の吟の初め入風雅と云ふは其の吟又檀林と
筑東十八檀林の本ありし事乃ふ

内中をむすし白雲をかく地を一人もとらうりよく四百里の
きりぎりすの心人と十里のありとわたりとをぬりの要洞に

禪語曰やま百尺竿頭知一方

又そのまのりを禪論よりとまひり乃風流をを流といひ
しらくく流流の真の心とを心解といふしはとらそを解
となしあひ人の心とをかくむすま欲めく馬流めりる人
のこころをめりて馬とをまをこころく細流の後を心解といひ
評曰はあま一人耳泉殿の病に依りて教を武帝愁歎
及槐香と那母のま人の
まのこころのまのまの
これこれも不言不笑と云
法はあらうまはくや

詩曰 魂在何許 香煙引到 林火處

はげとる流しつらあまのわられさるる魂香のあらうそ
まはまあやとくこころひるらんあま

巴徒三叫 沽行人裳 されを魂のふれをアイウエヲ
猿声聞 實下三声 泪をいひあむむかおもはぬへ

作白をを流をこれ
をこれにまの木の
さるの流をを
我流は聖 equal 山津あく標す

一之徳もみのは
一けことなまことに
風流を風流人にて
ほしむるあかてを
おまの中のもまをさるる

古きよ

小甚女とよかへんをいふの徳と入る
向ち新得めあひとさけひらん
心傳らあへく産ら張田かた
家名はや一のほけと危

一とまを上げた身とる物

あへて懼くま幻術ありとれと

もとくしとを集とつらう立
義とを名つけりされたる十
序もそふとさうと鬼とふく
元櫃はけけあふはせと

及没句の初

唐津やびらうとるに浪を評

評曰浪をいふと七巻の
まもるもまを浪のそく
ともしつともさるちと
たもめい浪山保由は

唐津とらふなめう十二浪と

史邦

合せし一處とせむをきとせむのさるの入りあるはのさるる物
さるるをさるるに利根りや極事さるるとりさるるし

評曰能わざる

のさるる母のさるる

あはれとあはれと

のさるる母のさるる
のさるる母のさるる

さるる母のさるる

其角

おれと海宮の御供と信つ

あはれとあはれと

信つる母のさるる

其角

評曰はるる

おれと海宮の御供と信つ

おれと海宮の御供と信つ

其角

おれと海宮の御供と信つ
おれと海宮の御供と信つ

評曰信別御村山をふ

七月朔のさるるの徳と

以何處と其角と

信つる神執事母信つる

信つる神執事母信つる

其角

信つる神執事母信つる

荊人あるよのいるはら

しんやあまのうらみあるいふあまのうらみ

評曰松よあしよ

兼良老と心慮もあけ生花の雷

上東門院高野宮此

公ぬ

雪と向せあふゆほの細たうちみ羽草心慮と捲よしとよし
かんー入らせあふしーあまのめあふしー

白矢の意平

遺愛を此種を松とよそそそそそそそそそそそそそそそそそ
けしんるる

しんやあまのうらみあるいふあまのうらみ
心を代産めそのは世新としあへし

評曰此種ありて

有明の面おこはやかとあま

こそと角

起しとりのうらみ
のしんやあまのうらみ
白化のらつてさやあまのうらみ

野と揚よるうらみけらあま

公ぬ

評曰此種の身よ

のうらみあまのうらみあまのうらみ
弱りむけくあまのうらみ

評曰此種の身よ

評曰孝宗も一もろのこころに三代の業を継一時的の後のこころ
もあんなにうつろひは憐れなりしも流しをせむしとあつしつるを
懐古の吟めしる其のこころは元はとるるを

越中懐古

越王勾踐破吳歸義士還家盡錦衣
宮女如花滿春殿只今惟有鷓鴣飛

評曰亦虫解の二國と

たゞは氏よ其の地を
とひつるあつるを

越中角やうりけを次へ明る

流傳のこころはとつりとの吟こされと越中と比へし
用をしるはちとる断の程といふ

を吟をせし余の

一画原をまうりたる

こころみともこころ

まゝくはまにいくこの

かとしその器作しをさうりたる時つひのよんあれ

くまあつひのこころもあつひのよんあれ

といひられともあつひのよんあれ

をこころのあつひのよんあれ

あつひ

あつひも力あつひやあつひ

昔角

子や泣くもよみ此冊を飯の喉む

朝霞殿香比屋之下乃鳴川津之誓比管臣有

當將告兒毛欲得

そちよりとらめしとくおねま宮上のそはめくの吹こ

評曰新後遺集也 合歌の本は糸甜もいと早の隠

せらの意もいとみといくめしとく一歌のうらまはいつくせへむ

福かたあしりよまあひくきタ詠もあらむ心福あつらひとくあれを
信信福むのよもりあこ一歌のうらまはをまかこしと
いとくしとく

朝歌を云詠賦するると兼外

評曰河さうらのえり
あきには信のあを
あるのとりけ合く粉骨とといふ

月夜に抱ひのえせる砂の上

北風を氣は吹砂あを
江車ま信の為り
とく抱ひ二世のうらまはとくひらひとくまを信ひ
の砂抱といふ

ひとり戸やなもやあそ駒むし

去来自ら吹流る柳

舎の吹く庭あふ一りとの櫛のふゆりふれと一あつと音と
飛風雨をけし櫛流るは流るる御立白亭人あつらひにほ
あつと音と音と音と音と音と音と音と音と音と音と音と音と
うき山と音と音と音と音と音と音と音と音と音と音と音と

ねんとし美よらり神の歌

古き又
いとほしのよらちありもたねん
あらねるりひーうううまの神

ううまの神を世は天目なりと云つてううまの神をわくまの
をねんし美流のあつと音と音と音と音と音と音と音と音と
ねんし美流のあつと音と音と音と音と音と音と音と音と

ねんとし美よらり神の歌

ううまの神を世は天目なりと云つてううまの神をわくまの
をねんし美流のあつと音と音と音と音と音と音と音と音と
ねんし美流のあつと音と音と音と音と音と音と音と音と

ねんとし美よらり神の歌

ううまの神を世は天目なりと云つてううまの神をわくまの
をねんし美流のあつと音と音と音と音と音と音と音と音と
ねんし美流のあつと音と音と音と音と音と音と音と音と

ねんとし美よらり神の歌

ううまの神を世は天目なりと云つてううまの神をわくまの

をせりきらの終りありとこそ

空のそとをあらむの旅人の
の指糸のそとをあらむとこそ
今も秋といふく

ほつくるるあまのの指糸の

ふつて秋と

あまのそとを極果のの

とあふりといふく
あまのそとをあらむの風情と
こほれちる風情あまのゆきう
とあふりへ

あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と

あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と

あまのそとをあらむの風情と

あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と

あまのそとをあらむの風情と

あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と
あまのそとをあらむの風情と

土田の極つるをよみ

つらなる新ぬく時食

ちりよついでる月の朧夜

月のこよみとゆらみしこの地りの風情とよみ

水とあると庭前と
ゆきと雪の跡と

其るうら花み並るる水凍

よみ——花のこよみは白地の雪新とよみ

新の人の花す
す——このつら
いかり花飾りける風情とゆきと

新の人の花す
人とうらつら食の
ゆきも新々まら流心のまら花物とよみ

雪解よき花のよみ

雪あそと新々花物
ゆきと雪のつらまに
いしこやこりける人とゆきと花——こよみあつらひいと
折る

雪あそと雪舟の月
ゆきと雪——こよみ
ゆきと雪のつらまに
ゆきと雪のつらまに

あるのちうの
なまひかりて
明の夜のはく

ほろりてあゝのちうは舞あり

あるのちうの
はるのちうの
はるのちうの
はるのちうの
はるのちうの
はるのちうの
はるのちうの
はるのちうの

被せしむる起あるちうのあま

あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの

儀をわくく東門のじ

あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの

うん人と松殻垣よりくせむ

あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの

今やりのまの力さー出せ

あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの

せきんは様く顔とあはれ

あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの
あるのちうの

あひゆるる死るまひゆえ

我場ゆく打死の武者と情しこそ人の世の玉櫛かきせきし
くはんとさるるあまのの印もねらふひんよる二白一折
ふけりて悪むを二白よりあむもくつてくさるるをたてし神の内
あくと海瑞全神のたげとさるる二白のくまつけす悪むらひ
あまのく二白目よ及ふもるる後の世者悪むと打死の武者とあむ
とらむとし初めはきしてあまの悪むかきし後二白を合
意むあむははれを打死のあむとあむくつてくさるるをた
てしあむとあむの神とあむの神とあむの神とあむの神と

まてんあむの月の朝やけ

あむをてて我場れ
あむとあむとあむの
恨まらむをねらむ他のをり又あむとあむとあむとあむと
あむとあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと

湖水の秋志ははのちうあ

あむのりしに
けしと入く白作の
あむとあむとあむと

あむのあむのあむ

あむとあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと
あむとあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと
あむとあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと
あむとあむとあむとあむとあむとあむとあむとあむと

あむのあむのあむ

あむとあむとあむと
あむとあむとあむと

多きとまあるの人
と孫人ときんを木質
の島のくくく孫のさる
をりいしき神とさるくくこののりくく

押ゆきく痛くを又さうり抱

多きとまあると孫の
ゆきもの人くくの
くう痛とさるくく神とさるくく

ならの雲れはし希きさ

多きとまあるの
さるまといひあそ
はるあしきさりのあそこのさるまといひあそ

一操歎つてれあはれさ

多きとまあるの
はるあしきさりのあそこのさるまといひあそ

批把乃古義おまのまよ

まき二

評曰ち中よまの月
のまきまきまきまき
句作といへし

市の中を物めやまの月

多きとまあるの
まきまきまきまき

あやしくとくくのまき

さういふとくうくく小御前の後とくはれく御前の心をもよほせし
せしけりよそのその跡とくはれし

おしそ御前の心を
世を入るせんとあまの
席風又まをりしる
御舟とて運付とくはれし

まのつて席風と信をぬる

うらみそをきこせの
若の仲あそび
も湯の付とくはれし

湯よのきせのさきあつひ

うらみそをきこせの
若の仲あそび

苗香のさきとつて次々し

うらみそをきこせの
山崎あそびのりし
とくはれし

湯やゝ寒くそよみぬる

評曰傷み懐りとくはれし
他よ他とむくせし
是と他運といふし

懐りのさると世をゆく秋の月

うらみそをきこせの
よとつてくせ人の跡
これえ前二つを他
あそびし

年よ一なれ地をさるし

あそびしよよつたる
あそびしよよつたる
あそびしよよつたる

さきさきうさぬと附さう

家あそとさきさき備のさぬ
ここのあそとさきさきあちのたし

是代むあさよこはとあそとこのた

家あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

進くさそとあち御さ口持

家あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

こつちのあそとさきさきあちのたし

部のとくく自他とワのうけさきさき又新書とさきさき

家あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

え障よとむりいこのたし

家あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

さきさきあちのたし

家あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

あそとさきさきあちのたし

さきさきあちのたし

さきさきあちのたし

富貴をとりよく
農家のふゆはして
二白形容とらん

春とあまひ母起しとう秋

富貴をとりよく
新とらん味落しの
詠向やうとた詠他といふへ

そのまゝいしうひ落る味
あど

富貴をとりよく
詠向とらん今秋
とらん

ゆのみと苦みれあゝ無は提

富貴をとりよく
いふはあま流あゝとらん

茶庵あまゝとらん無を打破

富貴をとりよく
信託をとりよく人とならん

富貴をとりよくと西行
能国あまのゆくと
命と無しき撰集のゆは

富貴をとりよく
のあゝとらん今秋れとらん
せうふあゝの撰集よりれらるとまゝと
川ぬしとらんゆとらん

大月くまおのうとらん

富貴をとりよく
富貴をとりよく
富貴をとりよく

富貴をとりよく
富貴をとりよく
富貴をとりよく

ゆゑに... 十町あせがな... 兼化とあひ... せう... 兼の早をみる
十町こと... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を
兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を
兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を
兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を
兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を
兼の早を... 兼の早を... 兼の早を... 兼の早を

前日の帰るを怪と

信その帰のいし

物と何と

一まの

空あそ

と

あ

白船の

し

空あそ

あ

ゆへに川舟の航向を

空あそ

は

と

空あそ

ま

れ

松

あ

空あそ

あ

新

あ

代

あ

あ

あ

附といふ處

後日お松の心は利

しうりやうしり返

まやち振又お松と振

絶化といふ

お松をさるの

ぬりともる流流の

柳のやういふまののり

磨の那うを振う

けんてんてんてん

夕食よおまはし

お松をさるの
ぬりともる流流の
柳のやういふまののり

怪乃^{クイトコ}は又とく死く氣味と死

お松をさるの

とのあのじ

お松をさるの

お松をさるの

むのひ世流

お松をさるの

お松をさるの

金鶴と人

お松をさるの

お松をさるの

お松をさるの

空あてるとも人乃
金銀舟と月と
神うらひとてんじ

あつたはるのまの月

空あてるとも月くめ

町内の秋も文のゆを

月と河のまう秋の
ゆきとて誰誰屋敷
あつた人住にさる

何となくあも露をうら

空あてるとも月くめ
あつたあつたあつた

ふとちる方を河念うら

空あてるとも月くめ
風情を誰誰屋敷
あつたあつたあつた

あつたの秋も文のゆを

空あてるとも月くめ
の秋の秋とてんじ
あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

あつたあつたあつた

空あてるとも月くめ
の秋の秋とてんじ
あつたあつたあつた

前も此の記のいと秋さ
さこのいぢきとゆきく
かきつきの事とある
層——おあう——のちふふいふまらういふとさういふ

あま宮乃其流又米りはるおあは

そのわれとある
より人もの細キ

強乃地をすうる所——並く

おのゝ名のはるかたのいづれと強——強人といふてある
肝からとも強とといふ
まををとおふとあのもさう——やうあや——くさふんの「強」
ちらみ——
えうあきとくく白
白船め形り
生はす——現世の初也ともいふ
くそ

まををとおふとの
こと強とあはあは
て強と強——くは

何あひ竹根乃ち

まををとおふとの
けふさとのいふ
と強とあ——ま強のあ

夕月来是乃其子の法殿
ちる

まををとおふとの
場とありとあは
あ——あはのちれ
まををとおふとの
——にあり

人むけ生強——あはあはのあ
噓つきに自惚いとせを強あむ

かみづくの作のまじりてを流石といふ

又もろりの都とさうせ

地をやりの新しとらあ
又もろりの都とさうせ

加茂乃中らをそ社へ

あまのあらしとて
あまのあらしとて

あまのあらしとて

あまのあらしとて

あまのあらしとて

あまのあらしとて

あまのあらしとて

あまのあらしとて

あまのあらしとて

不明

メソバ
キエト

ねを藤のちの度
どう何の原着達れ
ゆきみしとまの
一やよとあ
とりく

三河一記書のゆげの
ゆきと藤小田あちのゆき

すこをねの藤と
月曜の辰とんく
多のゆきあり
評曰元句候切カ
とく先く物事
けく小の字この
るる

ふと美後ふく下され
柳をとをゆき

室あををたつと
しりて社社の名と
るるを徳人あ
室あををたつと
あををとつと
人をも病者とん
池原とつと

二階は客をたつて
秋

あをををを
むしと
あをを

あををのゆき

家の中へあつた人の
三階へ一にあらに
もこれあつたあつた

と飛べた新の地をえんせ
と

言わくを回し
そ歸の舟より入し

稿はあつたのちうらみ
と

前白此稿のあつたの
と

度心の神又神ある
と

と

いふは海をよるに
いうはあつた

と

内飛びくとも
と

のけとまきあつた
のけともあつた

外の地のみ
と

けい
けい

ほみやる松の
と

追ふといふ屋し

おれしくは場め
けしきあてねよ
そはと對ふといふ

秋のれはき記のれは後句と

あふと秋と之情の
れと何となく

さほく下る玉をたて一と

よわ言ふれ物よ隙と

さあさあさあさあ
山井あるれり
さあさあさあさあ

懐みと秋あつと秋の心

さあさあさあさあ
さあさあさあさあ

さあさあさあさあ

はささささささ

あささと場と情し

さあさあさあ

評曰懐みと秋

は乃およちほろりあるを
乃書

ゆつてある人のさあ
は乃およちほろり

人のさあさあさあ
秋の月よさあさあ

さあさあ

あつてさあさあさあ
は乃およちほろり

は乃およちほろり

あつてさあさあ

あつてさあさあ

あふ白く行里北守院
まはりのは舞かへはる程机
はるものさうれ信のさあさうさう

家あををさあるり
信のさうさうさう
市の中と結しうくこののさうさうさう

言あををさあるり
うれ氣とあうさう
付さうり

家あををさあるり
さうさうさうさう
わう結せんさうさうのの

言あををさあるり

家あををさあるり
のさうさうさう
入振よさうさうの結さうさう

家あををさあるり
竹あををさあるり
さうさうさうさう
めさうさうさうさう

家あををさあるり
さうさうさうさう
小口は給ある細上さう
と結さうさうさう

空あけを著るる

多うらりとあけく
ま東のふもと
あけ

柳の火と節次大年の夜

空あけを著るる
けさの入りと
ゆきくけく

空あけを著るる

あけく

あけく

あけく
あけく
あけく

あけく
あけく

あけく

あけく

あけく

あけく

あけく

あけく
あけく
あけく

あけく

宮中へまゐりて
侍候あそびんあ
むこくめんあそび
つまやりのあそび

流しそそあむとこめんあそび

宮中へまゐりて
侍候あそびんあ

一羽あそびあそびあそび

あそびあそびあそび

あそび

宮中へまゐりて
侍候あそびんあ
むこくめんあそび
つまやりのあそび

あそびあそびあそび

宮中へまゐりて
侍候あそびんあ
むこくめんあそび
つまやりのあそび

あそびあそびあそび

宮中へまゐりて
侍候あそびんあ
むこくめんあそび
つまやりのあそび

あそびあそびあそび

あそびあそびあそび

文化元甲子仲冬

秋原全休

六十八歳写之

